
やがて目覚める魔女

ジェルミサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やがて目覚める魔女

【Nコード】

N0807V

【作者名】

ジェルミサ

【あらすじ】

坂巻すみれは高校1年生。魔女に憧れている。図書館で借りた本を読んで頑張っているけれど、すみれは魔女になれるのか。

世の中には不思議が沢山ある。楽しい事から怖い事まで沢山の不思議。どうしてこんなに不思議で答えの中々見つからない事が沢山あるんだらうって時々うんざりしてしまう。その重みで生きることが嫌になっちゃったって錯覚するくらい。

その全ての謎を解き明かす為に魔法使いになる事にした。全ての正しい答えは魔法でなら調べられるはずだから。って事で、まずは魔女のなり方を調べないといけない。魔法は魔女でなければ使えない。

杖で「アブラカタブラ」って呪文をかけたら、謎の答えを手に入れる。それって最高じゃない？呪文で何でも出来るってお手軽でナイス。想像するだけでわくわくしちゃうものだ。

魔女になる事を決心してからの最初の日曜日、早起きして市立図書館に出かけた。魔女になる方法を調べなくちゃ。すごく楽しみ。朝の空気は気持ちよくて太陽も楽しそうだった。全てが笑っているみたいにキラキラ輝いている、5月の日曜日だった。魔女になる決心をして行動を起こすにはちょっと不似合いなくらいの上天気だった。だって魔女が魔法をかけるのは夜に決まっているから。明るい中かける魔法なんてうさんくさくていけない。だけど夜中に開いている図書館なんてない。子供は夜中は外に出られない。どっかで妥協しないと。

実際に図書館に行ってみると、驚くほど必要な本がない事が分かった。魔女のなり方の本が置いていなかった。図書館って予想外に役立たずな場所だった。もちろん、それは間違いだったって後で知

ることになった。でも、その時は知らなかった。何しろ子供だったから仕方がない。子供って目の前の事に気がつくのがやっとなんだもん。時には大人より賢いけど無知なのは確かだ。

私が行った市立図書館は必要な本が山となっている万能な図書館ではなかったので、とりあえずタイトルに魔女と名のつくもののかたっぱしから読んで知識をつける事にした。読むほどに本によって魔女も様々でますます色々分からなくなった。もちろん1日じゃ足りなくて、何度も図書館に通う事になった。学校の図書室も利用した。

魔女と名のつく本はうんざりするほどあった。中にはちっとも役に立たないものも多かった。子供だましの魔女の話なら表紙にそう書いておいてくれればいいのにそんな親切な本は一冊もなかった。読む時間も惜しいほど私は今すぐ魔女になりたいのに。タイトルに魔女と書いていなくても魔女に関する本は多いのかもしれないけど、そこまで調べる時間はなかった。

何冊も読んでいくうちに魔女になる為に重要と思われる大まかな共通点をいくつか見つける事に成功した。

魔法アイテムを持っているか、持っていないか。魔女になるには必要なものが沢山あった。必要、と言うよりも、持っていないと魔女とは言えないもの。

魔法アイテムを集めるのは本当に大変だった。まずは魔女鍋。鉄、またはスズの魔女鍋なんて小学生のおこづかいではとても買えない（というより、どこに売っているのかわからない。外国だろうけど）し、ぐつぐつ色んな物を煮詰める為の暖炉もなかった。こんなんで大丈夫？

暖炉はサンタとも関わりが深い「不思議」につながる重要なもののはずだった。どうしても欲しかった。仕方ないので自分で作る事にした。まず、レンガ。いくつ必要？煙突も。うちはマンションの4階。このマンションは8階建て。ずい分と長い煙突がいる。しかも、私の部屋からまっすぐ煙突を伸ばすには少なくとも4つの部屋に穴を開ける（私の部屋から垂直に煙突を作るにはそうするしかない）ことになる。どうやって頼もう。思わず大人たちが「いいですよ」って言っちゃう言い方である？3日間ずっと朝から晩まで考え続けて、2日遅刻し、授業中に3回立たされ、1回いのこり掃除をしてもアイデアは何も思いつかなかった。親からも先生からも友達からも怒られっぱなしの生活にうんざりして、暖炉はひとまず諦めた。

何でもお金もいるけど、頭も使うものだ。お金はどうしようもなくても、頭は日々使うんだから少しづつ賢くなってるはずで夜にはいい事を思いつくかもしれない。希望は捨てなかった。

暖炉や魔女鍋以外にも問題は山積みだった。杖、魔女のホウキ、薬草。干からびたドラゴンなんてどこにいけば手に入るのか。水晶球。その辺に売ってるんじゃない、本物のタロットカード。

長期戦になりそうだった。現に本を読んで調べている間に私は小學生を卒業してしまったのだから困ったものだ。ひたすら本を読んでいるだけだった。時間が経つのは恐ろしく早かった。

気の短い私は全く別の方法で少しずつでも魔女に近づく事にした。私は数ある魔女本の中でも一番気に入った「エルシー・デニング著 やがてめざめる魔女」という本をお手本にする事にした。実際に人間から魔女になった人の話だ。作り話（百科事典とかお堅い本のコーナーに置いてなかったから）かもしれないが、参考になる事は満載の本だった。

著者の魔女になりたかった動機も気にいった。自分を醜いと言っ

た男に対する仕返しとして魔女を選ぶなんてスゴイ。容易な整形や暗殺に走るのではなく、魔女へと向かった心意気が氣にいった。遠回りな上、最低男に対する未練まで感じさせる選択。よっぽど最低男が好きで、よっぽどひどいことを言われたんだろう。ふられた経緯は書かれていなかったけど、未だ恋愛経験のない私にすらその熱い気持ちは伝わった。私に失恋経験があったら号泣したかもしれない。

デニングは魔女についてこう書いている。

「魔女には大別して、生まれつき魔女と修行して魔女になった魔女がいる。違いは魔女の血が流れているかどうかだが、どんな魔女になるかを別とすれば大事なのは魔女の「血」ではない。魔女の血が必要となるのはいずれ訪れる昇級審査の類いのものであり、大魔女や魔女様になるつもりがない大半の魔女にとっては無関心な事である。魔女独特のプライドの高さから生まれつき魔女の方が一段高い気位を持っている感是否めないが血統を重んじる重要性は魔法の力の強さと比例しない。

魔女にとって一番大事なのは名前だ。名前により自分の力の強さが現される。魔女名を新たにつけようとする見習い魔女を目指す人間にとっては特に、その名を非常に慎重に、心してつけるべきである。

もちろんたいがいの場合自分でつける前に名前は決まっているものだ。それを見つけれられるかどうかが最初の砦とも言えよう。

魔女の名前の中で一番重要なのは秘密名である。魔女は必ず持っていて、魔女かどうか見分けるには秘密名があるかどうかが一番分かりやすい。それを持たぬ者は魔女にはなりえない。

中世の魔女狩りで人間達は秘密名の存在にまるで気がつかなかった。狩った相手が魔女ではなかったからだ。実際に暇つぶしに火あぶりになって断末魔の悲鳴をあげてみた魔女も実は何人かいるのだが、

殆ど全部と言っているほど処刑されたのは罪もないただの人間で、その多くが普通の女性だった。

当時の魔女達は魔女狩りを人間達が楽しんでいる祭りの一種だと思っただけで、たまたまかかっていた訳だが、実際に行われていた事が魔女の名を借りた虐殺であった事を知り、後日嘆いた。嘆いたのはもちろん少数だ。殆どの魔女が気に留めなかった。それは魔女が冷たいからというわけではなく人間が自分達で解決すべき問題だからだ。魔女ならば魔女狩りなど意味のないものに時間を割いたりしない。自らが狩られる事に対する恐怖等ではなく、実行不可能な事だからだ。これについては魔女の死の項で述べる事にする。

さて、魔女になろうとしているあなたに問う。あなたには誰にも知られない、自分の心の中ですら口に出せない秘密の名前があるか？
」

「やがてめざめる魔女」はまだまだ子供の私にとって難しい本だった。大体これから魔女になろうとしている人に魔女狩りの話なんかするあたり、意地悪だ。意地悪って魔女のイメージにぴったり。私は意地悪になりたいから魔女になりたいわけではないんだが。

デニングの話は面白くて読まないでは、そして考えないではいられなかった。

私は自分の秘密名についてじっくり考えてみた。坂巻すみれ。この名前以外に私に秘密の名前なんかあるのか。魔女名にしたって私は何て名乗ればいいんだろうか。これからずっと、もしかしたら何百年も使う事になる名前。慎重につけなければ。もとい、探さなければ。

自分に他にも名前があるとしたら、自分の今の名前に似た名前だ何となく思った。すみれは英語でヴァイオレット。小3の時にお母さんが教えてくれた。ヴァイオレット。うん、いいかもしれない。でもそのままではダメだ。魔法を使う為には丈夫にしくちゃ。デ

ニングも言っている。

『魔法を使うには何でもまずそれが丈夫かどうかを確かめなければいけない。呪文の途中で壊れてしまうようなヤワなモノを基盤にして魔法をかけたりしたら、魔女として失格だ。』

魔女ならば魔法に対してゆるぎない確信を持たなければならぬ。全ての魔法に対しその精神で立ち向かう事が出来たなら、魔女としてかなりの腕を持った魔女と言えよう。無論その時の称号は魔女様と呼ばれるものである事が多い。そのぐらい魔法を完璧にかけていくことは困難である。

丈夫でないものは丈夫にする必要がある。例えば私の魔女名ウリーピは元々英語の *ripe*、熟した等を意味する単語であるが、丈夫にする為に力を加えて捻じ曲げた。ライブのままでは私は魔女見習いに辿りつく前に潰されていただろうが、ウリーピはそんな目にはあわぬ。丈夫でないものは丈夫にする必要がある。これには初期魔法から高等魔法まであらゆる魔法が使われる。丈夫にする方法はいくつかあるが、呪文を使うのが一番容易である。薬を作るのは時間がかかるうえ、失敗すると危険も大きいためある程度の力を持った魔女向きである。力のない魔女では薬が失敗かどうかの判別が容易ではない。ましてや他人が作った薬では。材料集めから、作り方に至るまで、他人に頼っていては魔女とは言えない。魔女に学校はないのである。

本当を言うと、この本も本来ならあまり役立ててはいけぬ。ただ、真実を示すものは学ぼうとする者にとっては重要であると私は考える。だから、記した。

さて、魔女に学校はないが、魔法を学ぶ事の出来る場所はいくつかある。それは魔法学校として機能している場所もあるし、どうしても安定性だけを重視するならばそれを選択するのもいいだろう。だが、その場合は二度とこの本を開かない方がいい。相対する力はやがて己を蝕む。どれだけ犠牲を払って「学校」で学ぶのかは分か

らないが、瞬きをする間もない間に魔法は消え去るだろうから。私は「学校」で学んだのではないし、「学校」になる気もない。』

ヴァイオレットを丈夫にするにはどう捻じ曲げたらいいんだろうか。私は自分の秘密名探しよりも先に魔女名を完成させる事で自分に自信をつけようと思った。一番大事な事だっと思ってたからだ。「ヴァイオレット」という言葉をずっと頭に思い浮かべていたら、紫の洪水に襲われているような気分になってきた。これがデニングの言っていた潰しっぺヤツ？

私はずい分と気味の悪い不安な夜を何時間も過ごした。でも、それだけの事はあった。明け方になって、私は魔女名を手に入れたから。

ヴィオリータ。私の魔女としての名前。それが思い浮かんだ時、私の中に空白があるのに気がついた。きっとここに秘密の名前があるって感じた。大丈夫。私は魔女になれる！

秘密名の存在も確信した私は次のステップに上がる事にした。

『本来地球上における魔女というのは元々薬師や産婆だった者を指す事が多い。確かにあるべきものがあるべき形に誘導するのは魔女らしいと言える。』

魔女は無から有を生む事はないからだ。そう見える場合は別の世界、もしくは空間から「借りてきた（奪った）」に過ぎない。その行為を「飛ばす」と言い、魔女自身が世界や空間を移動する事を「飛ぶ」と言う。

これが本当の魔女の飛び方だ。いわゆるありがちなホウキにまたがり空を飛ぶという行為は意味をなさないものである為、本来魔女が行うとも思えないが、見習い魔女の誰かがホウキを基盤に魔法をかけた際に生じる一種の浮遊力で遊んだ事が元になっているようだ。実際私もホウキにまたがって空を飛ぶことこそ魔女としての醍醐

味だと初めは思っていたので、わざわざ満月の晩を選び何度か飛行してみたが、上の段階に進んだ際にはその子供じみた行為を二度としなくなった。多少残念ではあるが本当に「飛ぶ」事の方が面白いのでは仕方あるまい。飛ぶことと浮かぶだけでは比較にもならないのだ。

魔女とは魔女宗を信仰するもの。すなわち自然を理解し愛する力を持つものである。土、火、風、水、大気に親しむ事は何よりの修行である。

魔女を目指すものよ、窓を開け、天に向かって両手を差し伸べよ。その中に何がつかめるか。次の修行の始まりだ。』

デニングの修行は魔女鍋や薬草等道具よりも精神の方が重要視されていた。これならお金は必要ないので子供でも出来る。物足りない感じはするけどさ。とにかく魔女っていうのは気が長いらしい事はよく分かった。

デニングは自然に耳を澄ますことに最低でも半世紀はかけたい、等と無茶な事も書いていて、それを読んだ時には啞然とした。そんなに年と取ればホウキで空を飛びたなくなるに決まっているじゃないか。

本の後ろについている作者紹介がこの本には全くないからデニングは一体何歳なのかは分からない。この本が発行されたのが1975年だからもう死んでいるかもしれない。実際に自分も同じ修行をした後にこの本を書いたのだとしたら、デニングがいくつか修行を始めたのは謎だけど、10歳から修行を始めても1975年には60歳にはなるんだから21世紀の今はもう死んでいるかもしれない。それとも魔女だからまだ生きている？

その日から、私も窓を開けて空を眺めた。朝も夜も暇さえあれば

空を眺めた。面白さなんかまるで感じなかった。これを50年もひたすらやってたらそりゃ何らかの力もつきそうだ。私はやってられない気分になり、図書館で他の参考になりそうな魔女の本を探した。やっぱり役立たずの本が多い中、それでも何冊か見つけた。

魔女宗に関してはかなりグロい儀式や意味の分からない儀式をやる集団なんかもいるらしい。素っ裸で踊るとか。焼けた灰の上を歩くとか。子羊の生き血を飲むとか。そういう魔女のグループを見つける方法は知らないし、仲間になるのも嫌だったので、まどろっこしいが結局デニング方式で様子を見る事にした。デニングのやり方では誰かを傷つけることがないから。まだ力のないうちに変な魔法を使ってその跳ね返りで台無しになるのもごめんだった。

ヴィオリータは自分の血も含めて、血を一滴も流さないで魔女になりたかった。ホウキで空を飛びたいのなら別の師を探した方がいいのかもしれない。それこそどこにあるかは分からないけど「魔法学校」を探すとかね。でも、私がなりたい魔女にはデニング方式で十分間に合うはず。デニングはお金や儀式の要求しなかったけど、時間を要求したのだという事に気がついたのは私が高校生になった春のことだった。

私は「やがてめざめる魔女」を図書館から借りては返し、借りては返しという生活を何年も続けていた。発行した出版社は潰れていくから自分の「やがてめざめる魔女」を取り寄せる事も出来ないし、古本屋でも全くお目にかかれなかった。いつそ盗んで自分のものにしてやろうかと思ったけど、邪まな気持ちにヴィオリータが染まったりしたら大変なので我慢した。

どんなに忙しくても図書館の貸し出し期限ギリギリの2週間毎には図書館に訪れた。受付の人は全員覚えた。「やがてめざめる魔女」は私以外の注目を集める事は全くなく、毎回私は無事に借りる事が出来た。受付の人は何度も同じ本を借り出す私を何とも思わないようだった。見上げたプロ根性だ。私なら絶対に何か言ってしまうだろう。何で同じ本ばかり借りるのか。そんなの題名を見れば分かるか。いや、読んでない人には分からないだろう。この本はただの小説とは違うんだから。それとも魔女を本気で志すもの以外にはただの空想小説なのかもしれない。

中1の時、隣町の戸建てに引っ越す事が決まった時、私は図書館が遠くなる事だけが悲しかった。親は念願の庭付きの家を手に入れたことを無邪気に喜んでいたけど、私はただひたすらわが身を嘆いた。魔女の修行を始めてから私は周りからどんどん浮いていたので、友達関係で悲しむ必要はなかったのは幸いだった。

中1の終わりという時期もあってか、転校先の学校でも大して注目もされず、無難に卒業を迎えた。新しい家で大不満なのはやっぱり暖炉がない事だった。どうせなら古びた洋館を買ってくれたら良かったのに。普通の家なんてダサイ。親は私が魔女になろうとしてる事になんか興味がなさそうだったからしょうがないのか。私の秘密を教えてもないから彼らが知る訳がないのだ。だが、あえて言い

たい。親なら少しは察しろ。

なんで今更家をつけたのが理解に苦しむ。9つ上のトモ兄は昔から犬が飼いたくて仕方がなかったのに、前のマンションでは飼えなかった。が、すでにトモ兄は就職して県外にいた。意味がない。老後のためとか、親も親なりに考えた結果の決断なんだろうから、子供の私にはどうにもならない事だが暖炉のない家なんかがつかりなだけだ。

引越す事が決まった時、お母さんが「犬かネコを飼おうか？」って、目を輝かせながら言った事がある。私は首をすくめた。

「飼いたいなら飼えばいいじゃん。私はいいらない」

お母さんは呆然としていた。馬鹿じゃないだろうか。

娘の冷めた態度に傷ついたのか、家にはペットはいない。一番飼いたかった人がいなくなっているのだから仕方ない。当然の結果だと思う。

私は使い魔として、猫やカエルやカラスなんかを飼っても良かったけど、そういう目立つものはなるべく後で揃えた方がいいような気がして、すぐには飼う気にはなれなかった。第一ペットとして親から干渉を受けなくなかった。私だけの使い魔を育てるには親は邪魔だった。お母さんは例えカエルを飼う、と私が言い出しても、10日もすればウキウキと私のカエルの世話を勝手にするようになるだろう。彼女はそういう人なのだ。そんなのまっぴらだ。黒猫を街中でみかけるとうずうずと左手の先がしびれることもあったけど、やっぱり我慢した。使い魔を探すにはもうちょっと余計な時間がある。先に親が自分のペットを飼ってくれたらいいのに。

高校からの帰り道、私はちよくちよく図書館に寄ることに決めていた。最長2週間毎とはいえ定期的に図書館通いを必ずしなくてはいけない私にとって自宅と高校の間に図書館がくる事が望ましかったのだが、何とか希望が叶ったのだ。これからはバス代もいらな

自転車を汗だらだらかきながらこがなくてもいい。何しろ定期があるからだ。高校生になって本当に良かった。

しかし、せっかくの定期を使って図書館に行く予定の第1回目の今日、明日に控えた高校入学テストというありがたくないものの実施の為に新しい魔女の本を探したり、読んだりする時間のない私はまっすぐカウンターに行って手続きをしてそのまま帰らなければいけなかった。

せっかく図書館に通うなら図書館で勉強すればいい、と親は何度も言ってくるけど、図書館で勉強する人の気が知れない。静かなイメージが一般的にあるけれど、あそこは意外にうるさいから。何より本たちがざわざわしているのがうるさいのだ。私が魔女へと歩き出したからそう思うのかは謎だけど、今日も何人かの学生らしき人間が勉強している姿が目に入り、不愉快だった。鈍感なヤツラめ。

本の背表紙を見ているだけで吐きそうになる時がある。本の中にあふれんばかりの文字が詰まっている事は疑い様のない事実。魔法を使う時には呪文が必要だ。それにしても呪文が載っている魔法の本は一体どこに行けば見つかるのだろう。

『魔女は呪文を多く知っている。自分で作る事もあるが、昔から使われている呪文を利用する事が多い。一部の魔女は全部自分で作り出す。これはそれが有効な呪文であるかどうかは試して見なければならぬので大変危険で手間のかかる方法である。人間から魔女になるものにはお勧めできない。人間の寿命が一つの呪文を見定めている間に終わってしまう可能性があるからだ。それに、自分の呪文に捕まってしまった魔女見習いを私は知っている。』

魔女の呪文が載っているのは、もちろん魔法の本である。普通の本のフリをしている本もあるので確認には十分注意したい。それ自体が魔法を使えるのだ。使い込んだホウキとは比べ物にならないが、ある程度の魔法が書いてある本なら200程度の世界を飛ぶ際に基盤として利用も出来る。別の世界で呪文が必要になった際に呪文の

確認も出来る為、飛ぶ時には魔法の本を基盤としての用途以外でも携帯する魔女は多い。

記憶も呪文で思い出す事は出来るが、複雑な上面倒な呪文が多いので荷物にならない限り魔法の本を携帯する事を私はお勧めする。

もちろん本を空間に隠し、必要な時だけ取り出せるようになるれば楽なので、最終的にはそれをお勧めする。私はまだそこまでの力が無い。空間に何冊の魔法の本を流してしまったかはもはや数えることが出来ないくらいだ。」

デニングは魔法の本については説明してくれているのに、肝心の呪文については教えてくれない。何度も「自分で作ろうか」とも思ったけど、自分の呪文に捕まるという事を想像しきれないので踏み込めないでいる。それってノイローゼ状態って事なんだろうか。何となくイメージするデニングの「捕まった魔女」は本当に不気味だった。あまりクリアに想像したら魔女になるのを止めてしまいそうだから想像しきれないのかもしれない。

小さい頃テレビアニメで見た魔女達は何の苦労もなくある日突然魔法を使えるようになっていたのに。魔法って簡単だと思っていたのに。あれがどんなに紛らわしく危険な情報であるか、私は魔女になる修行を始めて思い知った。

例えば、今私の手の中にキャンディーを取り出すとする。そのキャンディーが幻ならば別に問題はないが、実際に食べられるものなら、加える力の大きさは計り知れない。砂糖や水あめ。その他香料や着色料？

とにかく、具体的にキャンディーに何があるのか細かく把握して、さらにその材料を世界のあちこちから少しずつ失敬して、キャンディーを作らなくてはいけないのだ。それから魔法で作ったキャンディーが占拠している体積分の空気をどこかへ飛ばさなくてはいいけな

い。そのままだとキャンディーの周りの空気が圧迫されているからキャンディーが存在できないのだ。お店でキャンディーを買ってきただけだが、魔法で取り出すよりもずっと簡単だ。

私は魔法って杖を一振りでキャンディーを無限に目の前に出せるものだとか勘違いしていた。

もちろん、私がちゃんとした魔女になれば、違う世界からキャンディーを飛ばして、その空気をそのキャンディーをもらった世界のその部分にすげ替えるだけで済む。それが魔法の力だ。だけど、それには有効で丈夫な呪文が必要だ。でも、私にはそれを知る為の本がなかった。

空気をキャンディーにする事は出来ない。無から有は生まれないから。もちろん幻のキャンディーなら別だ。魔法はちつとも万能じゃないのだ。修行を続けるうちに分かった。

「魔法を万能のもの、例えば神の力や奇跡のように感じているのなら、すぐに修行をやめて人間としての幸せを追求した方がよいであろう。その方が簡単だし、実りも多い。魔女への道は平坦ではなく障害も多い。」

寿命をいじる事は理屈から言えば可能である。が、もちろん魔女はそれをしない。魔女の死については後で別に述べる。

他の世界から何かの命を飛ばすのは簡単だ。すげ替えていくことにより、無限に近い命を紡ぐ事は出来る。

しかし、それにより世界のバランスは確実に崩れる。命に関して魔女は関わらない。不老不死の錬金術を魔女の生業とするのは「魔女」ではない。一つの命、例えばどんなにはかない小さな命であつても、その寿命をいじった時の代償は大きい。宇宙空間を巻き込むほどの異常事態になるのは簡単なのだ。魔女は自然界のバランスを保ち続ける存在ではない。魔女は調律師ではないのだ。

魔女よ、命に関わることなかれ。これは警告である。□

世界を魔法で思い通りに出来るのにやらないなんて、魔女って何て自制心が強いんだろう。私なんか例えば明日のテストをうけなくて済むようにする為ならどっかの大陸が沈んでも構わないのに。もちろん実際にそんな事になったら後悔するに決まってるけど。

その日も無事「やがてめざめる魔女」を借りた私は揚々と家路についた。異変が起きたのに気がついたのは、夕食を食べもう一度テストの範囲のおさらいをしようと自分の部屋に戻った時だった。

私は子供の頃から潔癖ともいえる片付け魔で、トイレに行く時くらいは別だけど、ちよつと歩いて3分のコンビニに夜食を買いに行く時でも机の上を全て片付けてからいく性質だった。夕食の時のように10分以上部屋から出るような時は本棚に教科書もノートもしまった。きちんと教科順に並べていた。そうしないと落ち着かないのだ。部屋に入った瞬間、何もかもが収まるべきところに収まっているのは本当に落ち着く。いつだって「今から始める」状態にしておかないとイライラして何も出来なくなってしまうのだ。

今日だって間違いなく夕食前に私は完璧に片付けてから部屋を出た。が、机の上にはノートが1冊出ていた。しかも、ノートは開いていた。あり得ない事だ。私は今までの人生でノートを開いたまま席を離れた事はない。避難訓練の時ですらまずノートを閉じてきたのだ。

私があっけにとられてぼんやりとノートを見つめていると、急に空中に黒いエンピツが現れ、そのままノートに何か書き出した。私はノートに駆け寄った。と、同時に何か大きな力によって椅子へと座らせられた。後から気がついたけど、私が気絶しても頭をひどくぶつけないように気を使ってくれたんだと思う。

ノートにはものすごく黒い字で私へのメッセージが書かれていた。

『初めまして。私は魔女のヒルース。あんたの魔女修行を観察させ

てもらふ事にしたから挨拶に来た。今の私はちよつとした悪さをしてお仕置きされてるもんだから閉じ込められてて暇なんだ。

あんたのヴィオリータ、いい名前じゃない？ 気にいったよ。私へ何か言いたい事があつたら心の中で思えば何だつて通じるけど、それじゃあんたも面白くないだろうから、あんたにも書かせてやる。

このエンピツは魔法のエンピツ。普通の人間には見えないから安心して何でも書きな。』

『ヒルースさんへ

分かりました、信じます。だからもう部屋に変な匂いを充満させたり、体を痺れさせたりするのは止めてください。観察されるのは嫌です。

分かりました。許可します。だから体をかゆくするのもやめてください。それにしても不公平ではないですか？ なぜあなたは私を思い通りに出来るのに、私からは何もできないのですか？』

『あんたが見習い魔女の見習い並みに力がないからだよ。修行不足を呪うんだね。あんたがもつとしつかり生きていればちゃんと呪文を見つけれられたはずだよ。私は修行し始めた頃からあんたをずっと見ていたけど、あんたはずっと不足している。本を読むならちゃんと読みな。ヒントが隠れているから。』

最初のページにはこれだけが書かれた。私はいつの間にか気絶して、朝を迎えた。多分神経が疲れきつたんだ。テスト勉強が出来なかったのはこの際大した問題じゃなかった。本物の魔女が私にコンタクトをとつて来た。UFOを見つけるよりもすごい事だ。私はテストなんか手につかないと思ったけど、ちゃんと登校し、テストを受けた。集中なんかちつとも出来なかったのに、回答欄が全部埋まった。

隣りの席の男の子は時間ぎりぎりまでシャーペンのお尻を噛みながら必死に空欄を埋めていた。檜山くん。泣きぼくろがあつて、始業式で見かけてからそれがすごく気になった。いつも泣きぼくろに

見惚れてしまうのだ。彼は私の人生で初めてと言っていていくらい特別気になる人だった。

早く家に帰ってヒルースと昨日の会話の続きがしたかった。でも、先輩に捕まってしまった。腹が立つ。

「坂巻さん、どうしてまだ美術部に入らないの？うちの高校を受験したっていうから、てっきり今度こそ入るって思ってたのに」

金子先輩はゲージツに命をかけた人で、中学の頃からうつとおしくまとわりついてくる羽虫のような人だった。

美術部？私がこの高校を選んだのは図書館と自宅の延長線上にあつて、なおかつ私の学力のレベルにあつていたからに過ぎないのだ。芸術クラスには入ってないんだからそのくらい気がつけよ。バカじゃないの？

「一度見学においでよ。本当にすごくレベルが高いし、みんないい人だから」

うちの学校の芸術クラスはものすごく人気が高く、県内一の進学校に合格できるレベルじゃないと受からないゲージツ好きにとつては切ない現実があるらしい。

仕方がないので金子先輩を含むその他大勢のゲージツ好きだが知能は一般の人間はみな美術部に入っているらしい。美術部はうちの学校一人数が多く、活気があり、卒業生も有名人がいるらしい。芸術クラスの人間は授業の課題に追われて美術部に入る余裕のある子は少ないらしいけど、放課後は3つある美術室を美術部とごちゃまぜになって利用するので自然に交流できて、レベルが高いらしい。高文連並に校内コンクルの作品はすばらしいものがある。見にきたらいい、と既に聞いた事のある説明と初めて聞く説明を織り交ぜて興奮しながらとうとうと話された。

くだらねえ。

私は金子先輩に毒づいてやる事も出来たし、中学の時は実際にあんまりうつとおしくて彼女を突き飛ばした事もあった。図書館の閉館時間が近づいていて、2週間の期限ギリギリの日だったというのに説得しようとするんだからしょうがなかった。あの時はそうやってでも逃げるしかなかった。「やがてめざめる魔女」を手元に置いておくためにどうしてもやらなければならない事だった。

私は先輩を突き飛ばした事をまだ謝ってない。金子先輩も忘れたわけでもないだろう。なのに未だに私に話しかけてくる。先輩のゲージツの為に私が必要なんだろうか。そんなゲージツは諦めたらいいのに。

私はいつでも学校を無難に過ごす為だけに絵を描いてきたのに、周りは私の才能とやらを無駄に評価してくれた。金賞や最優秀賞や内閣総理大臣賞やらで、図書カードや賞状や絵の具セットなんかを何度ももらった。信州への2泊3日の絵画研修への招待券とかももらった。面倒だから行かなかった。風邪を引いたふりまでして辞退したので研修へ行かなくてもしばらく生活（寝込んだり、おかゆばかり食べたり）が面倒だった。嫌な思い出だ。

私にとってはその程度のものなんだ、絵は。興味を持てなかった。どうして適当に描いている私の絵ばかり評価されるんだろうか。実は芸術クラスからは推薦の声がかかっていたけど、絵はつまり描いているのは面倒だし、課題がキツイという情報も持っていたから普通クラスを受験したのだ。受験勉強とはかりにかけても3年間毎日延々続く沢山の課題の方がよっぽどきつそうだったから。金子先輩がこの話を知ったらどう思うんだろうか。

私が高校に入ってからもうすでに100回はくり返した「興味ないんで」の一点ばりの返事を続ける事2時間。私もつくづくお人よしだ。話なんか聞かなければ良かった。人生を無駄にした。

クツ箱でクツを履き替えていると、檜山くんが同じサッカー部の子とやってきた。運動部が帰るにはまだ早いのにもう帰るのかな。よく見ると足をくじいたらしい子に肩を貸していた。気の毒に。まだ仮入部の時にそんなにキツイしごきをされる訳もないから、うつかり怪我したんだろ。うな。大丈夫？ くらいの事を言っても構わないだろうけど、私は無言で学校を後にした。急いでいたからだ。他人との交流は金子先輩との会話で十分果たした。何なら今月はもう学校では一言もしゃべらなくてもいいかもしれない。それぐらい疲れた。

『魔女仲間は出来れば早い段階で持ったほうがいい。弟子入りして修行に励む必要はないが、情報交換から得るものは大きいからだ。もちろん一人を好むのなら人間はおるか魔女ですら何百年も訪れない場所はいくらでもあるのでそこに住み着けばよい。しかし、その際自分が魔女として当然身につけておかなければならない技能を身につけていなかったとしたらどうだろう。大変だ。その早期発見にはやはり魔女仲間との交流が一番である。互いに鍛錬するがいいだろう。』

私は魔女になろうと修行を始めてすぐグネートという魔女に出会った。』

『ヒルースは私の魔女仲間になってくれようって思ったの？』

家に帰ってすぐ、私は一日中考えていた質問をノートに黒いエンピツで書き込んだ。でも、いくら待っても返事ない。1時間じっと待ち続けてから気がついた。昨日の部分に答えが書いてあるから、ヒルースは答えなかったんだって。私ってつくづくバカだ。

暇つぶし。

そうか。それだけなんだ。はっきり言われて寂しいような、割り切れていて楽なような変な気持ちがした。それは去年通っていた塾の隣の席の女の子のような関係だったから。

田中さんはものすごく大人しい人で、休み時間も熱心に練習問題に挑んでいた。普通よりも1ヶ月遅れで入塾し、塾の友達を上手く

作れなかった私は田中さんの隣にいれば、仲良く話している他の女の子達の事をあまり考えなくてすんだ。

休み時間まで勉強するほど私は勉強好きではなかったはずだが田中さんの隣りにいると何となくそのまま勉強を続ける気になった。おかげで受験生の間も「やがてめざめる魔女」を毎日何ページかは読む余裕があった。全部もう暗記しているのだけれど、ページをくっているだけでも安心した。その頃には私はデニングをまるで私の一部のように感じてきていた。

私は質問を変えた。

『悪い事って一体何をしたの？』

返事はすぐに返ってきた。文字が勝手にノートに現れるのは見ていて不思議だった。夕焼けがいつの間にか終わって気がついたら夜になってるみたいにならずと見ていたはずなのに、気が付いたら終わっている。夕焼けが夜になる瞬間に似ていた。

『聞いてどうする？あんたに支えられる内容なら昨日話してる。あんたは潰された見習い魔女の話を覚えてないわけ？』

背筋がぞつとした。潰される、というのはやっぱりどんなものか分からなかったけど、魔女に永久になれなくなるものなのは間違いなかった。それは困る。ヒルースは私が見習い魔女の見習いくらい力がないって書いていた。

呪文はとっくに見つかっていた？私は今まで読んだ膨大な本を思い浮かべてため息をついた。あの中に使える魔女の本があったんだ。もしかしたら退屈と思った本にこそヒントがあったかもしれない。

空を見る修行だって私はすぐに退屈してさぼりがちなんだもんなあ。私はノートを閉じ、黒いエンピツを筆箱に入れ両方とも引き出しに戻すと窓にかけよった。窓のカギを外すのもどかしい。ヒント

があつたんだ。きっと今までの生活のあちこちにヒントが存在したんだ。私は叫びたくなった。

魔女になりたい！早く、早く！

今日の夜空は曇り。空があまりに遠くてじつと見ていると涙が出てきた。自然と自分の境界線を感じた。私は「私」で「周り」とは違うんだ。私は初めて「自分」に気がついたような気がした。

これは潰し？それとも魔女だから陥る感覚？自信がなくなった私に現実は無かった。私は「やがてめざめる魔女」を暗記するくらい何度も読んだのに、初歩的な事すら分かっていない。もう何年もかけたのに。

魔女になれなかった魔女っているんだろうか。私は生まれながらの魔女ではなかった。私は人間から魔女になろうとしてる途中なんだ。って事は永久に魔女になれないかもしれない。それでも不思議はない。魔女名を持っていて、生粋の魔女なのに気がつかないまま人間として死んでいく魔女もいるんだから。

『私がその魔女に会ったのは必然だった。私はある程度の呪文を使いこなし、3程度の世界を飛ぶ事を覚え、非常に充実した日々を送っていた。その日々に消えることのない疑問を送りこんで来たのがジェシカだ。』

彼女は自分が魔女である事に気がつかないままその生涯を閉じる所だった。魔女名はアシス。名乗られなくとも魔女である私には届いた。

彼女は魔女どころか生まれながらの魔女様だった。その力の強さゆえ魔女として生きる事よりも人間として終わる事を興味深く思っていたと思う。そうとしか考えられない。

魔女は人間のふりをして暮らし、死んだように見せかける事もあるが、アシスは本当に人間のように死ぬ所だった。魔女としての死。

魔女がたかが56歳で死ぬなどあり得ない。しかもアシスは貧困が原因で餓死する所だった。

アシスは町の片隅でゴミに紛れて息を引き取った。私はそのショックで3年言葉を失った。それでも私は魔女だったから死ななかった。魔女としての力が働いたからだ。

さて、最終章である。魔女の死について語ろう。ここまで読み進んだ者よ。魔女として生きていく決心はついたのだろうか？

あなたは本当に魔女か？

なりたい、なりたくない、という選択以前にアシスのような魔女もいる。地球ですらそうなのだから全宇宙、全世界には何と多くの魔女が暮らしているのだろうか。』

私は部屋の明りを消して空を眺めつづけた。多分空を眺める修行を始めてから一番長く空を見ていた。色々な事を考えた。時々涙が出てきた。世の中は謎だらけだった。私の中にも謎が多くあった。あんまり多くて私は私自身が宇宙のような気がしてきた。でも、私の周りにはやっぱり宇宙があった。日常生きている時はとてもここまで考えられない。こんな事をずっと考えて生きていたらおかしくなってしまう。

どうしてだろう。魔女になろうと思った最初の時よりも謎が増えてきてる。しかも複雑で絡み合ってる。昔の謎はもっと単純だった。：ような気がする。これから先もっと謎は増えるの？魔法で謎は本当に解決する？

引き出しの中のノートが気になった。ヒルースは私の心の中を読んでいるんだから私の迷いが全部分かってる。何か答えを、書いてくれているかもしれない。

ヒルースが最初に黒いエンピツを使ってノートに文字を書いたの

はただのパフォーマンスであることは分かっていた。エンピツなんか使わなくてもヒルースなら簡単に文字をノートに記す事が出来る。私には永久に読みきれないほどの文字を一瞬で書けるだろう。ノートになんか書く必要もない。私の脳に一瞬で想像しきれないくらいの文字を記す事だって出来るんだろう。

答えを教えてくれるかもしれない。せめてヒントを。自分の中の弱さを振り払いたかった。でも、私はちゃんとこらえた。魔女というのはそういうものだ。自分が弱いという事を理解して、それを他人と共有する事はない。魔女の苦しみは魔女自身の形なんだから。

『魔女は本来強い生き物ではない。だからこそ呪文で自らを守り、修行して強さを得ようとしているのだ。魔女は永遠に未来への歩みを止めない。魔女は変化し続ける不変であるうとするもの。』

さて、あなたが魔女の秘密を知ってしまった所で忠告をしよう。

魔女は自分自身を傷付け、その傷の深さで自分自身を知ろうとする性質がある。深手を負って500年以上のたうちまわった魔女もいる。

ヒュッテというその魔女に傷を見せてもらったが、それは本当にひどいもので私ですら目をそらした。聞けば魔女ですら彼女の傷を正視した者は一握りとの事。ヒュッテは自身の傷を他の魔女に見せつける事で自分自身を取り戻そうとしていた。彼女の傷は深く彼女を飲み込もうとしていたから。ヒュッテがその試みに成功したのか失敗したのかは分からない。分かっているのは、ヒュッテはただ自分を知ろうとしただけだという事だ。

私は魔女であるがゆえに彼女から離れ、また彼女も離れていった。今もヒュッテが癒えない傷に苦しんでいる姿を思い出す。救いさえあればそれが現実ではない事だろう。あの姿を捨てなければ、今頃はすでに大気に溶けてしまっているだろうから。

自分の形を人の目の中に見ようとすると間違いがおきやすい。ヒ

ユッテのようにならない事を祈る。私の言葉があなたには届いているだろうか？』

届いているどころじゃない。私が今自分に行っているのはまさにそれじゃない？！自分で自分を傷つけないと魔女は自分がわからないのだろうか。魔女ってマゾ？！マジョとマゾ。音は似てるかもしれないな。…バカな事を考えてしまった。

とにかく、私はまだ修行を止める気はないし、諦めるつもりもない。ただ、このままではラチがあかない事は分かる。違う修行方法を見つけないくちや。

私には日記をつける習慣なんてなかったけど、今日はちょっとどこかに記して永遠に残しておきたい気分。何しろあの檜山くんと話す事が出来たんだから。

昼休み。昼食のパンを食べ終えた私がいつものようにぼーっとぼおづえをついていると、突然名前を呼ばれた。はっとして見上げると、泣きぼくろが目飛び込んできた。檜山くんだった。

「坂巻さんてさ、絵上手いよね」

突然の褒め言葉にうろたえた。面倒だからいつもはこういう話題は徹底的に無視するんだけど、相手が檜山くんじゃ、それも出来なかった。絶対に出来ない。出来るわけがなかった。

「う、上手くもないけど」

緊張のあまりでもってしまつて、顔から火が出そうだった。何これ、信じられない。格好悪い。

「そんな事ないよ。オレ、校長室前に貼つてある絵、見たもん。あれ、この前の美術の時間の課題の絵じゃん？皆同じもの描いてたはずなのに、あんなの描けちゃうなんてすごいよね。しかも、あんな短い時間でさ。授業中の時間だけであんなの描けるなんてすごんだよ。オレ、芸術って全然ダメだから本当に尊敬したんだ」

「そ、う、かなあ」

ああ、こんな風にしか話せない自分かもどかしい。こんなんじゃ檜山くんを避けてるみたいじゃん。話し掛けられて迷惑みたいじゃん。

いつもはもつとそっけないし、もつと冷たい返事しかしてないのを棚にあげ、自分の社交性のなさを呪った。今更後悔したって遅いくらい人に冷たい態度とってきたくせに。それにしても檜山くんは何だつてまた急に声をかけてくれたりしたんだろ。隣の席に座つてるだけの私に。普通はそれだけで十分会話の対象になるもん

だってことも私の頭からはすっぱり抜けていた。それくらい社交の世界からは遠ざかっていたのだ。

「いや、実はさ、明日からまた新しい課題が始まるじゃん？今度は自分で描きたいもの探さないといけないのに、オレ、何描いていいかまるで思いつかなくて。坂巻さんは何にしたか参考にしたいくてさ。こういうのズルかもしれないけど」

私はぶんぶんと首を横にふった。ズルくなんかない！ズルくなんかないでしょ。

しかし、檜山くんと同じく私は何を描くかなんて何も考えていなかった。それどころかさらに酷く明日の授業で美術があることすら忘れていた。もちろん美術で新しい課題が始まることなんてすっかり忘れきっていた。クロツキー帳やら絵の具やらは全部ロッカーに置きっぱなしなので美術は時間割として気にする必要もない授業だったせいだ。絵は先生が言ったモノを描くだけだから事前に準備なんてした事もない。

「えっと、まだ決めてない」

「じゃあさ、何が初心者に描きやすいものか教えてくれない？」

描きやすいもの？！

質問の意味が分からなかった。突然アラビア語を言われたぐらいの勢いで面食らった。

何描いたって同じでしょう？

目の前のものを見て描く。もしくは思い出して描く。抽象画なら、絵の具を適当に塗りつける。それだけの事じゃん。でもそんな事言ったら軽蔑されそうで、困ってしまった。描きやすいもの？

逆に描きにくいものなんかあるわけ？それって何さ。そんなのどこで判断するわけ？どうしよう。檜山くんの役にどうしてもたいたい。でも、私には檜山くんの質問に答えられるだけの知識がない。

ん？絵を描く知識？…それをやたらに持つてる人を知ってるじゃん、私ってば！

「ええっと、今、ちょっと思いつかない、んだけど、良かったら私、中学の時から美術部、の先輩がいるから、相談してみようか」

檜山くんは目を輝かせた。

「マジ？そんなの頼んでいいの？」

金子先輩の顔を思い浮かべた。ゲージツ関係の事ならあの人は何でもホイホイ相談に乗ってくれるに違いなかった。別に私が美術部に入らなければ教えない、とかケチな事も考えないように決まってる。

檜山くんは、ちょっと頬を赤くして言った。

「良かったら、その時オレも一緒に行ってもいいかな。時間かかないなら部活の前とかにでも聞けるし」

「別にいいと思うな。でも、先輩を探すのに時間かかるといけないし、良かったら、今から行こうか。昼休みも美術室になら絶対いるから。檜山くん、部活に遅れると良くないよね」

ちよつと、何かだんだんちゃんとした会話になってない？私たちが結構話せるんじゃない？檜山くんと廊下を連れ立って歩くのはいい気分。松山君は全然そう思っていないだろうけど、ちよつと学校デートみたいだった。周りでおしゃべりしている子達が私達のことをうわさしてるような気がして恥ずかしかった。もちろんそんなわけがない事もつきりわかっていた。檜山くんも私も目立つほうじゃないから他人の噂話になる訳がなかった。他人から噂されるのなんて嫌だからいいんだけど。

先輩は思ったとおり美術室にいた。私が来たのを最初は美術部にようやく入部する気になったものと思いつき誤解していてガツカリされたけど、来たわけを話すとまたすぐに嬉しそうな顔になった。「そう、美術の自由課題ね。去年もあつたわ。そうねえ、私の時は、

美術部以外の子は石膏か静物か風景にしていたかな。石膏はね、こういう形のシンプルな方が描きやすいよ。先生受けがいいのはこういう形のだけど、光と影のバランスがちょっと難しいかも。絵は苦手なのよね？」

「ハイ」

先輩が見本として指差した多面体の石膏は色んな形があるのは分かるけど、どこを見て描きやすいと判断するのかさっぱり分からなかった。面が多いと影をつけるのが大変だから、それが難しいって意味？分からないな。

「えっとね、静物なら…うちの美術室って絶対誰かが描いてるから常に花も果物もあるけど、どっちも痛んだり、いつの間にか誰かが食べちゃったりする欠点があるの。だから授業中に描き上げた方がいいけど、今度ある授業の2時間でおおまかに、でもいいけど、ある程度描き上げる自信はある？」

「イヤ、ムリです」

緊張してる檜山くんがかわいかった。運動部の檜山くんにとって「先輩」ってのはそれだけで緊張するもんなのかな。もしかしたら先輩のクラスにサッカー部の人がいるのかもしれない。先輩は告げ口したりするタイプじゃないけど、そんなの分からないしね。体育会系の年功序列の凄まじさは何度も見かけたから私だって知っている。たかが一年か二年早く生まれた事だけであんなに威張れるのは才能じゃないかと思う。球拾いが遅い、という理由で校庭をランニングさせるアレ、どんだけ競技にいかせるんだろ。

「じゃ、風景なら校舎とか校庭とかうるうるできるから楽しいかもおすすめはね、裏庭か、屋上。あ、渡り廊下とかも味があるのよね。でも、描きやすいのは…ねえ、坂巻さんは何描くか決めたの？」

「まだ」

「じゃ、今の私の話聞いてて、何か描きたくなっただ？」

私は何も考えていなかった。先輩の話をよく聞いてすらいなかった。体育会系の意味不明さを考えながら檜山くんの泣きぼくろを見

ていた。でも、そんな事素直に言っちゃまずい。私はちょっと考えてから、玄関、と答えた。

「玄関？」

「そう。外から職員玄関を見た構図。何となくいいかと思ってた」
「…そう。確かにいいかもしれないわね。私、まだそこは描いてなかったな。檜山くん、上手い人と一緒に気後れするかもしれないけど、せっかく一緒にクラスなんだし、坂巻さんと一緒に描くっていうのもいいかもよ。ただ、やりがちなのが真似しちゃうってことだけ。うちの先生達ってそれだけは嫌うからねえ」

「オレなんかが真似したって、真似したってことすらバレないかも。だって、この前の課題だって、クラス全員が同じもの見て描いたのに、坂巻さんの絵は別物だもん」

檜山くんの笑顔に涙が出そうになった。この前描いた絵の何がいのかちつとも分らないし、たかが課題を校長室の前なんて人目につくところに張り出した先生にもむかついていたんだけど、一気に感謝の気持ちに傾いた。

そんなにいい？描いて良かったかも！むしろあんなのでいいなら何枚だって書きます！！とここでこの前の課題、私が描いたのって何だっけ。

その後も先輩は一生懸命檜山くんの課題になりそうなものの名前をあげ続け、その会話を聞きつけた美術室にいた人たちも意見を出し始めた。話しながら時々視線がくるのが分かった。何？私の意見？そんなのどうだっていいじゃん。

ふと気がつくとは私は周りを囲まれて質問攻めになっていた。いつもどれくらいの時間で1枚の絵を書き上げるのか、とか使ってる画材とか。水と油じゃどっちが好きか、とか。水と油？ああ、絵の具の種類ね。そんなの先生がその時に言うのを使って描くだけじゃん。いちいち選ぶ物なわけ？大体私、油絵の具なんか使った事ない

な。最初のうちは一つ一つ答えていたけど、すぐに面倒になって逃げ出したくなった。でも、笑顔で会話に参加している檜山くんをほっぽって逃げ出すわけにもいかなかった。

「たかが授業だからどーでもいいです」って、私らしい答えを言ったらこの人たちぱつと蜘蛛の子を散らすようにいなくなるだろうか。でも、檜山くんに冷たい女だと思われたくない。いや、実際冷たいんだから、知られたくないが正しいのか。いや、どうせいつかはばれるんだから、その時期を少しでも遅らせたい、が正しい。こういうのって浅ましいかな。何でもよかった。彼の笑顔が少しでも私に向くなら。私は彼から好かれたかった。

自意識過剰かもしれないけど、美術室中の人が私の答えに注目していた。あろうことか廊下にまで人だかりが出来ていた。

「え、何であの子が？」

「し、聞こえない！」

「ちょっと、おさないで！！」

何これ、何の騒ぎ？私が周りを気にしだしたのに気がついて、先輩が話を打ち切った。

「さ、そろそろ教室戻らないとね。授業が始まるよ。」

えー、というブーイングの中、私は檜山くと美術室を出た。

「ごめんね」

私が謝ると檜山くんはびっくりしていた。

「何が？」

「私、美術部以外の人間が昼休みに美術室にいただけであんなに注目されるなんて知らなかった。動物園のサルじゃあるまいし、何だろ、あの人だから」

檜山くんは一瞬固まった後、わはは、と大きな声で笑った。

「サルっていうより、アイドルみたいだったじゃん。逆巻きさん、

すっごい注目されてたね。隣にいただけなのにちよつと俺も恥ずかしかった」

アイドル…。檜山くんって面白いこと言う人だな。

「私がアイドルなら檜山くんもスター選手ってとこじゃん」

私がそう答えると檜山くんは驚いていた。知らなかったけど随分表情が豊かなんだな。こういう発見って嬉しい。檜山くんは、「え？知らないの？」って顔をしていた。その表情の意味は分からなかったけど、可愛いな、と思った。

そう、私は知らなかった。何も。何も気がつかなかった。気がついたのは、私はこの人を好きなのかもしれないって事だけだった。それまで私は何で檜山くんから嫌われたくないのか深く考えてみる事もなかった。初恋だった。

その日、家に帰ってからが大変だった。何だか家中の汚れが気になった。バタバタ大掃除をしている姿をお母さんはから配された。

「どうしたの、急に」

「別に。いいじゃん、きれいな方が」

居間を片付け、台所に進み、お風呂を磨き上げたら真夜中を過ぎていた。次の日も学校から帰るなり掃除。毎日やってるうちに家中の窓はピカピカになった。モデルハウスのような家。悪い事をしてるわけじゃなし、親も最初はおろおろしていたけど、だんだん何も言われなくなった。

家はどんどんきれいになるけれど心の中は相変わらずざわついていた。ごちゃごちゃだった。寝ようとしても眠れず、夜中の2時からもくもくと2階の廊下を磨いたりもした。へとへとになるまで掃除して、疲れ切って眠る。それをひたすら繰り返した。

学校に行くと檜山くんが話しかけてきた。私はそれに答えた。私からも話しかけた。檜山くんが答えた。普通の会話なんだけど、そ

れが嬉しくて仕方なかった。サッカーの事にも詳しくなった。頼まれて、サッカーしている姿をスケッチする事にもなった。本当に人生に色がつくなんてあるんだ。私は自分が桜色に色づいている感覚に包まれた。

ヒルースは半ば呆れていたけど、それでも何度か話かけてきた。
『で、これからどうするわけ？』

…どうするって？

『出会いました。好きになりました。仲良くなってきました。じゃ、次は？』

はあ？次？次は何があるわけ？まさか、2年生になりました。クラス替えで違うクラスになりました。ハイ、さよなら。いや、2年どころじゃない。次の席替えで仲良くなったのもおじゃんになるかも。たかが席替えで仲良しじゃなくなった人たちって結構いるもん。席替えしました。ハイ、さよなら。って、嫌だー！

『馬鹿？何でそうなるわけ？』

他に何かあるわけ？あ、掃除ばっかしてこないで来週から始まる期末テストの勉強をしろってこと？

確かにそうだった。仲良くなっただけでもすごいんだから、それだけでも満足しないといけない。欲張っちゃいけないよ。今やるべき事は他にあるんだ。私は学生なんだもの。学生は勉強しなきゃいけないんだから。

『魔女には独特の知恵がある。それは自然界に伝わる伝承から、自らで感知したもので色々ある。が、それをむやみやたらに集める必要はない。魔女は魔女であるだけ。』

もちろん、日々修行に努め、魔女として生きる事は重要な事だ。

が、欲張っても期待した効果は得られないだろう。時間をかけないといけない。何事も一瞬で片がつくような生活をしていると本質を見失う。停滞する必要はないがさせる事もないだろう。何に時間をかけ、何に時間を割かない方がいいかは、自らに訪ねてみるがいい。魔女ならば分かるはずだ。」

きつと私は欲張っているのだ。もっと仲良くなりたいてって思っているからだ。かといってサッカーを始めようとは全く思わなかった。サッカーの応援を極めたいとも思えなかった。今の限界はここなんだ。そうに違いない。じゃ、私は学生なんだから、ちょっとは勉強しないと。きつとそこを伸ばす時期なんだ。それにしても学校の課題って何でこう面倒なものが多いんだろ。数学の面倒なプリントをやつとの思いでやつつけた私は、ヒルスのノートの表紙をなぜてみた。

「ねえ、ヒルース。あなた、もしかして、私に檜山くんに、告白しろとか言いたかったわけ？」

ノートがぴくりと跳ねた気がした。何だ、やっぱりそうか。

「失敗したらどうするの。隣の席なんだよ。一緒のクラスなんだよ。同じ学校なんだよ。気まずいじゃん」

ノートは不満そうになった。表紙が黒くなった気がした。

「上手くいってもさ、その後どうするの。私は魔女になる修行してる魔女見習いです！なんて言えないよ」

私は自分である事が恥ずかしいとでもいうのだろうか？魔女になるっていうのは自分で決めた目標で、いつの間にか使命のような気がしていた。でも、本当は違うのかな。どうして檜山くんと言えな

いんだろ。もし、もつと仲良くなつても言えない？昔仲が良かった友達に、どうして私は言えなかった？

ノートが勝手に開き、文字を書いた。

『なぜ言えない？』

『だって、恥ずかしいじゃない。それに…きっと信じてくれない。』
『どうして言えない？』

どうして、だって？…だって。

『魔女だったら知ってるでしょ。異端。迫害。そこまできなくて
もね、周りにどうしても溶け込めない気持ち。寂しいのと、ほっと
するのと混じった気持ち。デニングは魔女裁判の時も、本当の魔女
は面白がってたって書いてた。でも、私にはそんな事が面白いとは
到底思えない。人が死ぬの、嫌い。』

ヒルースは何も答えない。

『時には死ぬよりも、無視されるのが辛い事もある。私も、今の自
分に自信を持つまでは、周りに合わせる事だけが解決策だって、か
なり頑張った。でも、無理だった。大勢の気持ちも、たった一人の
気持ちも、私にはまるで分からない。目で会話なんて出来ない。人
の気持ちが理解できなきや恋なんて出来ないでしょう。

告白なんてするだけ無駄だよ。仲良くなっただけでも最高なのに。
檜山くんと話すのは楽しい。それだけでいい。』

違う。こんなの全部ウソ。

私に分かってるんだから、ヒルースにも分かってる。私は逃げ
るだけだ。だけど、恋した人が全員必ず告白するわけじゃないでし

よ。必ず伝えなきゃいけないわけじゃないでしょ。
だったら私は…

「坂巻さん、ちょっといい？」

檜山くんと呼び止められて、迷惑だった事なんてなかった。私は勢いよく頷いた。

屋上へと上る階段。

放課後、屋上って来たら、それってまさか……いや、あり得ない。檜山くんが私を好きなんであり得ない。でも……！！

「金子先輩って好きな人いるのかな」

：ハイ?! 目の前が真っ白になった。金子先輩? 一体なぜその名前がここで?

檜山くんは真っ赤な顔をして、フェンスにもたれかかった。泣きぼくろがよく見えた。

「気がついてたかもしれないけど、ずっと前の昼休み、金子先輩のところに行っただじゃん。実はあれ、坂巻さんなら先輩のところに行こうって言い出すと思ったからなんだよね。」

あれから廊下で時々話すようになって、やっぱりいいなって思ってたさ」

「檜山くんは先輩の事ずっと好きだったの？」

うわ、声がうわずってる。もっとからかうような調子で言わないと、私の気持ちちがばれてしまう。彼が私をなんとも思っていないのは明らかだ。漫画や小説なら、主人公の気持ちを確かめたくて他に好きな子がいるフリをし、それを相談するっていうのは割と王道だけど、この場合は絶対に当てはまらない。…当てはまればいいのに。

「入学式が終わってさ、金子先輩、坂巻さん呼び止めたじゃん。その時からかな」

何だよ、最初の最初からじゃん。何、まさかの一目ぼれ？！

「勇気ある人だなあって思ってた。坂巻さんの話って、入学前から話題でさ、誰が一番に話しかけてみるんだろうって、密かにウワサされてたんだ。坂巻さん、全然気にしてないみたいだったけど。」

アレ、本当に気にしてなかったんだね。最近話すようになって初めて分かった」

「ウワサ？って私の？」

「だって、うちの芸術科から推薦きたんだろ？あれって、一応毎年枠があるんだけど、本当の意味での高校から指名された推薦って坂巻さんが始めてらしくって、ものすごく話題になってたんだよ。普通は生徒の希望を受け付けてから推薦が選ばれるんだ。知らなかったでしょ？」

私は大きく頷いた。何だよ、あの時説明に中学と家にまで来たハゲ達。断ったって気にしないでいいって言ったくせに。完全な個人情報だから、他の生徒には絶対に知られないって言ったくせに。

「じゃ、もしかしたら、私がいなかったら、檜山くん、金子先輩に気がつかなかったかもねえ」

涙をこらえて私がおどけると、檜山くんは真っ赤な顔で頷いた。

「うん。気がつかなかったかもしれない」

その瞬間、私が出来ればやりたかった事はその場から走って逃げ出す事だったけど、サッカー部の脚力から逃げ切れるとは思えなかった。だから、そのままそこにいた。次にやりたかったのは大声で泣く事だったけど、明日から突然クラスが変わるわけでも、檜山くんの記憶から私だけが抜け落ちるわけでもないから、私は泣

かずにそこにいた。

ウソ。本当は、そんな話題にも関わらず、私は檜山くんの傍にいたかった。彼のことが好きで好きでしようがなかった。だからもつたいなくて動けなかった。今すぐここから飛び降りたら、檜山くんの好きな人が私になるなら飛び降りてやるのに。地面が呼んでるような気がする。絶対に飛ばないけど。だって檜山くんはそんな事じや私を好きになってはくれない。彼の好きなのは金子先輩だ。

「話、聞いてくれてサンキュー」

「うっん。いつでも言つてよ」

嘘つき！檜山くんがいなくなった屋上。念願の一人きりになれたのに、私はやっぱり泣かなかった。校舎内で泣いていたら、誰かに見られるかもしれないからだ。檜山くんは私が有名人だと教えてくれたじゃないか。

…何で。どうして檜山くんの好きな人は私じゃないんだろう。私がゲージツに熱血じゃないから？

…単に好みの問題なんだろうな。ちっさくて細っこい金子先輩は、美人でもアイドル系でもないけど、それなりだし。

金子先輩を探そう。彼女が何が好きなのか。私は出来るだけ檜山くんに教えてあげないといけない。檜山くんの役に立ちたい。私は彼女が好きなのは「ゲージツ」ぐらいしか今のところ知らない。

先輩は被服室の窓辺に座り、中庭を描いてるところだった。

「あら、坂巻さん。ね、この構図どう思う？イメージは妖精の国、なんだけど。今月の部の課題、ファンタジーなの」

画用紙を覗き込む。悪くない。でも…

「悪くない。でも、当てるなら光はこっちの方がいいと思う。これじゃまんま上の方から見た世界でしょ。もう少し近い目線の方がよくない？」

「…なるほど。そうね。…ところでどうしたの？珍しいね、坂巻さんが私を探してるのって。何か相談？」

「…ヒマだったから」

私の大ウソの失礼な理由でも金子先輩はむつとしたりしなかった。こういう所なのかな、檜山くんが好きになったのって。私が金子先輩みたいな人間だったら好きになってくれたのかな。だとしたら今後檜山くんが私を好きになる可能性がゼロだ。鬱すぎる。

「先輩は好きな人が出来たらどうする？」

多分私は今までの人生の中でも最高に変な顔をしていたと思う。でも、一度出した言葉はひっこめられない。私は自分のバカさを呪った。こんなの魔女以前の問題だ。こんな事人に聞いてどうするっていうんだ。しかも、先輩なんか！でも、先輩は私を笑わなかった。真剣に話を聞いてくれた。

私はこの世の終わりになっても誰かに恋の相談なんかしない人間のはずだったのに。それもゲージツのことばつか言ってる先輩みたいな人に。

「私なら…直接はつきりと相手に好きって言うかな。待ってるだけじゃ手に入らないものって多いんだもん。でも、そう思えるのも坂巻さんのおかげかな」

「私の？！」

「私、何回ふられてると思う？ってこんな言い方したら気味悪いか。でもさ、正直、私はただ一緒に絵が描きたいだけなの。そりゃ、坂巻さんの気持ちも分からなくはない。普通こんなにしつこくされたら嫌だよな。でもさ、あなたってあんな魔法みたいな絵を描くんだもん。惹かれないわけじゃないじゃない」

パチンと何かが私の中ではじけた。先輩の話が続いているのが分かる。でも、声が聞こえない。沈黙。心の中が真っ白。これは…何？

ヒルースが直接私の心に文字を書いた。

『どう？』

確信はなかった。相変わらず疑問は渦巻いていた。でも、分かった。答えが一つ出た。

魔法みたいな絵。魔法。

魔法？…魔法。そうだったのか。

私はヴィオリータの器なんだ。「私」はずっと魔女だった。気がつかなかったのは私が「入れ物」でしかなかったから。生涯自分が魔女である事に気がつかないっていうのはこういう事が。

坂巻すみれのように自分の中に魔女を抱えている、そういう魔女がいるんだ。入れ物でしかなくても私は私。でも、他の人たちと同じでもない。

自らが魔女である魔女。魔女ですらない人。私はそのどちらでもない。魔女であって、人。ううん、そんなんじゃない。どこかの本で出てきたはんぱ者だ。いつから私はヴィオリータから離れてしまったんだろうか。そんなの酷い。私は魔女になるために、魔女である事を失ったのかもしれない。これは変えようのない事実？それとも、変化出きる事？

一つの発覚。一つの終局。…胸が震えた。

その日、私がどうやって家までたどり着いたのか分からない。

気がついたら朝で、私は自室のベッドの上で目覚めた。制服を着替えてさえいなかった。しわだらけになった制服を見て私は微笑んだ。何かが変わり始めていた。心のどこかが「ストップ！」と叫んでいた。それでも、私は自分の足をとめるつもりはなかった。今までの私よ、さらば。

熱いシャワーを浴びながら、鼻歌を歌いたい気分だ。出来るだけ早く学校に行かなければ。強力な磁石に引き寄せられる鉄くずのように、即行で準備して学校へと急いだ。

学校に着くと、またなんだかよく知らないけど、漢字がだらだらと並んだ名誉らしいコンクールの特選に選ばれていた。いつの間に美術の先生に出品されたのかも分からない。っていうかい加減ただの授業の課題を勝手にむやみやたらに色々出品するのをやめて欲しい。その賞が欲しくて懸命に描いたコがいるはずなのだから。不公平すぎる。

「坂巻い、お前、いい加減せめて美術部に入った方がよくないか？これ以上周りを拒絶する事もないだろう。お前の才能は確かだよ。何で芸術クラスの推薦をかったのかは聞かん。でも、うちの高校に入ったって事は絵を諦める気はないって事だろう？」

担任に言われて初めて私は「芸術クラスの推薦をかった女なのにうちの高校に進学した変り種」として有名だった事を知った。冷静に考えればそういう話がどこからかあれそうなのは簡単に理解できる事なんだけど今まで考えた事もなかった。口の軽い先生と、先生と仲の良い生徒ってのはどこにだっているのだ。

やっぱり普通はばれるよねえ。公に私を非難する人は誰もいなかったけど、私は入学式の時から悪目立ちをしていたらしい。私から周りに声をかけないから友達が出来ないのではなくて、周りも私を避けていたのか。びつくりだ。目からウロコ。

でも、そんな私に金子先輩は話し掛けてきた。勇気のいることだったろう。彼女は見た目よりも繊細だから。金子先輩も注目をあびて、結果的に檜山くんは先輩に気がついた。それはきっとヴィオリータがやった事。私が檜山くんに恋する前から魔法は始まっていたんだ。

絵を書く事はヴィオリータの範囲。これからも私の右手は魔法を使い続ける。私は修行を続け、本当の魔女へと近づいていくだろう。いつか「私」も魔女になる。その時ヴィオリータが私の中で目覚めるかもしれない。

魔女になるという事は自分の中の眠っている魔女に気がつくという事かもしれない。修行をしていて良かった。私はこのまま気がつかなかったかもしれないから。

檜山くんに会えて、好きになれて良かった。私が自分の恋にどういった決着をつけるかはまだ分からないし、もしかしたら家に帰ってすぐまた家中の掃除をしたりする生活に逆戻りするかもしれないかった。

ノートは机の引出しの中に戻ってきているだろうか。ヒルースが私にしてくれた事。それは彼女にとってはただの暇つぶしで、意味なんかなかったかもしれない。それでも、私は彼女がいなければ今でもただ悶々とデニングの「やがてめざめる魔女」を図書館から借り出しながら有効な魔法の本を探し続けるだけの生活だったかもしれないのだ。どれが一番よかったのかは分からない。本当はまだ答

えは出てないのかもしれない。うん、きっとそうだ。だってまだ私は15歳なんだもん。

これから無限に未来はあるんだ。魔女として、人として。

7（後書き）

自分に出来ないような事をさらっと出来ちゃうヒトは魔法を使っているのではないだろうか、と昔から考えています。

マジシャンはタネもシカケもあるフリをした魔法使いが大勢紛れいているに決まっています。すごいもん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0807v/>

やがて目覚める魔女

2011年7月27日22時36分発行